

六四年銘像（前表の19）は、もしグプタ紀元によるものとすれば問題外である。最後に通肩坐像型はみな疑問のあるものばかりで、五一年銘像も保留としなければならないとすれば、先の條件を満たすものはない（前表の5、11、18）。

こうして篩にかけてのこつた紀年銘像は、二二のうちわずか六軀にすぎない。そしてこの中で立像型は同一様式ゆえ、サールナート出土像（挿圖13）を以つて代表させることができ、偏袒右肩坐像型では、首なしながらカルカッタ博物館藏三九年銘像（挿圖14）が基準作となり得る。これら六軀以外の断片的なものでも、それぞれ遺存する部分において、銘記の年代における様式の一部を示すことは言うまでもない。しかし疑問のもたれる紀年銘ある通肩型では、年記が解決の決定的キーとならないとすれば、別な面から考察して、その占むべき年代的位置を推究してゆくよりほかはない。

なお右に述べた紀年銘の年数は、治世の王名を併記するものに關する限り、カニシユカ王紀元の年数を示すものと了解される。しかし私は上來、その年数をキリスト紀元に換算して示すことを一切避けてきた。それは周知のように、カニシユカ王即位の年次（その年がこの紀元の元年であつたと信ぜられる）が確定されず、異論が多いからで

ある。最近の研究では王の即位年に關し、西紀一二八年説と一四四年説とが最も有力視されているが、兩説ともにそのまま採用するにはなお未決の問題が多すぎる。しかしともあれこのカニシユカ紀元は、クシャーナ時代のマトゥラーで（同様に西北地方でも）使用されたことは疑いないところで、恐らくはそれ以後、グプタ紀元（西紀三二

九—三二〇年）が一般化するまでの、いわゆるポスト・クシャーナ時代にも、引續き使用されたとすることは可能である。それはレーウ女史の提説のように百位を省略した形においてであつたとしても――。

マトゥラーの遺品には銘刻あるものが甚だ多く、編年的研究に對して一見極めて有利なように見えるが、その中の紀年銘ある最も確實視されるものにして、なお右の通りである。そして問題の多く議論のやかましいのはひとり美術史研究の面だけにとどまらない。とにかくマトゥラー佛だけについて考察しようとしても、關連するあらゆる面からの綜合的研究が要請せられ、クシャーナ時代マトゥラー研究の容易ならぬことを思わせる。

附載 京都山中氏藏マトゥラー彫刻

——菩薩と供養者群浮彫について（卷頭色刷）

挿圖 14. 「フヴィシユカ39年」在銘佛坐像(Calcutta 4145)

マトウラー彫刻でわが國に請來されているものは極めて少く、私の知る限りでは、ここに色刷で示した京都山中氏藏のもののほか、

京都府隣館藏帝釋窟說法圖浮彫（世界美術全集一、色刷二）と河口慧海師請來、現東北

大學文學部藏の欄楯柱斷片と佛頭ぐらゐであり、ガンダーラ彫刻が相當多數請來收藏されているのと凡そ對照的である。それは從來、ガンダーラ彫刻が海外で不當に喧傳されたのに對し、マトウラーへの關心が甚だ低かつたという、世界的な傾向と關連する。それにしても、インド美術史上格別の價值と意義とをもつマトウラーの遺品が、數點でも我が國において見得ることは幸いといわねばならない。

さて山中氏藏の彫刻は長方形の石板斷片で、恐らく奉獻用の小塔の基部に腰板としてはめこまれたもの。彫像の臺座でないことは上面の仕上げ狀態その他から言い得る。高さ四八、幅六四・五センチ、銘はない。浮彫は右側約五分の二を缺失するが、

中央の菩薩坐像を中心として、左右に數人の供養者群、上方に飛天各一を、大體シンメトリカルに配してあつたものに相違ない。殘存

する左側も彫刻面に相當のいたみがあり、諸所缺損しているのが憾まれる。しかし、マトウラー彫刻に特有の黄斑あるシークリー産の

赤色砂岩の材質は見るものをして瞠目させるに足る（巻頭色刷参照）。

中央の菩薩は、臺座（その形は明かでない）

挿圖 15. 菩薩と供養者群浮彫 細部（京都 山中氏藏）

の上に結跏趺坐し、右手は揚げて施無畏印とし、掌の中央に輪寶のマークあり、左手はこの種の坐像タイプに一般的な、肘を張つて左膝上にこれを置く像容であつたと思われる。正面に圓形飾具を附した特異な寶冠をいただき、類例の少い大きい耳環を垂らし、腕釧をつけ、また頸から胸前にマトウラーに通有な帶狀の首飾を垂らし、圓い飾金具を吊す。上體は覆わず、布（衣）の束を左肩から左前腕に掛け、これを左膝外に垂らしていたもので（挿圖10参照）、なお腰衣などの處理は破損多くて判らない。光背も陰刻されてあつた形跡が見える。髪は螺髮で寶冠の下に僅かにうかがい得る。顔面は少缺あるが、眉間は白毫相を附し、眉は

弧狀で幅比較的廣く、眼はやや釣り上り、眼窩は淺く、下唇が薄いなど、螺髮型であるとともに、クシャーナ初中期の佛頭からは年

差のあることを思わせる。これらの手法の點は別として、本像は言うまでもなく圖像學的には菩薩であり、恐らく因位の釋迦菩薩を意味するものであらう。施無畏印の菩薩形は立坐とも作例が幾つか存する。クマーラス

ワームーが後世の寶冠佛の原型をこの像に見ようとす

るのは當らない
(History, p.56, n.5.)。

挿圖 16. 入口楣石浮彫斷片 (Mathurā P₁)

次に供養者は大
小八人が二列に並
んで直立し、右手
を揚げて長い花鬘
——上端は花束と
なる——をもち、
左手は臍前で掌上
に供養物——恐ら
く花を盛つた器で
あらう——をのせ
何れも正面を向き

全く同型で變化がない。頭髮は一見剃つたようにも、また頭巾をかぶるようにも見えるが(そのために前には比丘形かと誤つたが)、これは

頭髮を表わすのに、挿圖4のジナの場合、或いは挿圖10の供養者の場合のように、平行の線を刻んで示す手法に模し、または模す意圖であつたものと解される。どの顔容も、鼻梁を稜線として左右に鋭く傾斜した切り方で形成され、ややつり上つた眼の効果とともに、

全體的に鋭い表現となつて
いる。供養者
はみな右肩を
露わにして、
ちようどヒマ
ティオンを著
たガンダーラ
の天部や貴人
などの衣の表
現に似てお
り、左肩から
胸腹にかけて
斜めに陰刻の
衣褶を刻む。

挿圖 17. 「49年」在銘ジャйна教祖師像臺座斷片 (Lucknow J₂₁)

この衣は僧衣の場合にも通ずるが、しかし本圖の供養者群を比丘と見るべきではなからう。挿圖16と比較すれば明かで、同様の供養者は挿圖6や挿圖17にも見られ、これは俗人を表わすのに上半身を覆

わない形式に對する別の一形式であつたと思われる。この種のものでは、婦人の場合も胸部の盛り上りを除けば、簡単な表現では區別し難い（挿圖17）。なお上方には左手に花束をもつて撒花する飛天があり、比較的古いと思われる挿圖18の飛天によつて、元來の像容を想見することができよう。

さて、この彫刻のクシャーナ時代において占むべき様式的位置如何。まず全體として、彫法のかなり粗雑でどこちないことは覆えない事實である。菩薩の固い表現はもちろん、供養者群の變化なき一樣の、しかもみなフロンタルな表現は、衣褶の線の弱く形式的なこととも併せて、マトゥラーの様式論において、初期の造型性豊かな、力強い、表現に變化ある、そして仕上げの丁寧なものとは同列に置かれ得ない。そして

菩薩の螺髪、眉・眼・口のタイプなどは、一般に後期の特徴を示すとされるものである（山本六〇一^{七四頁参照}）。すると全體を支配する彫法の固さも、初期の未熟幼稚ではなくて、形式化の進み技術の衰えた段階の粗雑さでなければならぬ。そして様式的に本彫刻に近いのは、同様に固い表現になるサーンチー出土釋迦佛立像臺座浮彫（挿圖10）であろうか。これは既述のように、二二年の年記をもつが、到底カニシ

ユカ王紀元の一世紀前半に置かれるべきものではない。もつともマトゥラーの彫刻は、例えば四八年銘ジナ坐像臺座（挿圖6）と四九（或いは七九）年銘臺座（挿圖17）とを比較して、様式上の類似と銘の書體の相違とを如何に解決するかが問題である。レーウ女史のように、後者を書體から判じて一四九年と解するにしても、フヴィシユカの治世間四八年像との様式的近さを説明することにはならず、この山中

挿圖 18. 入口楣石浮彫供養圖斷片 (Mathurā I1)

氏藏の彫刻を置くべき年代を決定することは難かしい。しかし本彫刻は以上に記したところから見ても、クシャーナ時代末期乃至後クシャーナ時代初期に年代づけるのが妥當のようである（レーウ女史もボスト・クシャーナ^{ナとす} *op. cit.*, p. 309, n. 32）。西紀にして三世紀中葉ころか。もつとも年代については私は保留的である。

この彫刻は「東西古陶金石集」（一九二六年）に初めて紹介され（第二七圖）、その菩薩の部分だけは Coomaraswamy, A. K., *Hist. of Indian & Indonesian Art*, London, 1927, fig. 87. に掲げられ、二―三世紀と年代づけられた。筆者もかつて佛教藝術一七（昭和二十七年）に紹介したが、そこで記した解説は一部誤りがあるので、本文を以つてこれに代えることとする。